祝辞

小倉清貞

今席は大勲位侯爵大隈閣下齢古八旬ふ
達せられを聞召され天盃御下賜拝受被
露の招宴を開かれ其慶を分ちたまふと諸君
と共ふ到せるの楽を得まして祝辞を代て
郵薫言を陳へまたく
侯爵拝受せられる天盃上ゆ到せられ
御致寿の菊花は諸君に分配致知通り今より
三千年の乙のし此花の雫を賞して根髪童
眼の長寿有りまして之を世ふ角壽まて
唱えて祝寿を友古来牙歯度最上の吟物

眼の長寿者ありまして之を世に翁童と
唱えて祝寿する古来第一度最上の吟物
とせり彼この頃第七御紋章の御盃の
御授受を法国帝に奉ぶるに特り爵
爵の紫花に止まらず延て我々も類まれて
長寿の階段に就いうべきなり其設誘ふ
朱子文に曰く赤くなると言ふと書に親し
む知識の養に異ならざる道理なり
古へ哲人曰く学を学びて薫集力の効中
ふべきなり先生の私言なり
是れ翁童寿者毎に人寿百二十五歳
を準生存すべき理なりと揚言せらるゝ
点より観察すれば八十歳は三分の二寿
りて即ち此説の中等(ナカシ)と謂ひぬべきなり
乃ち又閣下元気のさかんなる這般の事
旅行中就寝の他来客に接し具話する面よ
りの招待に応じ日毎に二三箇所に臨席せら

乃ち又閣下元氣の甚なる及這般の事
旅行中就寢の他来者に接し其話面より
りの招待に應じ日毎に二三箇所に臨席せら
れ夫れ相撲角力に或は芸妓等の歌舞或は
音楽或は臨時の應問に毫も怠倦の色なし
て多々益々理解せらる。社者も及ぶる所
てなりとなす即ち之の現在より徴せんに
ならく

牧養爵の此百二十五歳説は當に内地人の
傳唱せるに止らず海外にも傳播したれ
ども之を遺憾に獨り人之を忽諸に付せざる是
れ東洋唯一の偉人の言なるから空言謾語
なるべしと信ずるより伯林衛生會長より
閣下に書を寄せて閣下は人壽百二十
五歳を保ち得べきものなりと説を求て
の果て信の若信なる及是れ人類世上の
福音でなく世人其理由を漏らす人事

り帰て信の者信なる及是小人輩也上の
福音でなく必ず及其理由を漏らされ人事
まもなく於在て其理由を辨明して答つら
ましを道理なるを種々しを其雑誌ふ
揚げて閣下ふ送り奉りし除閣下及同人
会長として此地の事をられ刀主家を招れ
会議なり輔こ此事に及ぶ時恰も好
し先生来り其席ふ陪し聞る所の大概記
陸て在る荒情を陳へ畢れ
先つ冒頭ふ人仁克己の要のなる及ならば
観るべし近く日露の戦争を如何ん彼此魯い
国度くくまのく身体隆大且彼此頃寒く慣れ
たつて防寒具を備ふるのみならず其陣地く
る難攻不落の要害地ふ獲り加ふる鐵繩網を
周囲ふ設け逸を以て榮を競の結構到られ
ずまし

る難攻不落の要害地を穫り加ふる鐵繩を
周囲に設け逸を以て勞を待の結構到らざ
るなし
之に反し我日本は国狭く人少く身体倭小且
気候甚しきして五十度を隔たる極寒故に防禦
の用意粗なり然るに戰時酷寒冬期
なりとも拒ぐに戰争勝敗決すべ
からず或時は敵の陣前に塹壕をうがち
五六日間無恐の心をしてしかるを敵機を見て起り
敵陣を突破し其陣地を奪ひし事度々なり諸
国觀戰者の実檢する所なりや是北克
己の雪の野を以て何をか
支化人は萬物の靈長なり活して嗜欲を
し造化其分を無し智識を賦与せし即ち
自己抑制せしむる為なり若し化嗜欲を
逸ひ放にして制御なき天殃あり
即克己の事を以て嗜欲を自制せざるべからず

過ぎるにして能く自分の性命を天殃あり
即ち己の言を以て嗜欲を自制せざるべからず
の所なり

近く禽獸を看よ生活業達の五倍の
壽を保ち其性命を知の能力を自制する能
はざるの故なり造化月經時の他交接を
八度者人命二度の所なり恒に動物身經
時に之を自活の能あり人も亦自活生計
の能力を具せざるべからず即ち世五六歳なるも
其度天位道生殖器の慾用を克己の言
を以て自制する所則造化禽獸と同く
五倍の一百二十五歳の壽を保有せしむるか
如安雅定し得べしと余は斷信するなり
と語られし様を記侍す先生此解説誘を
傍聽して呼此福者を聞の遇うしとの
感を発一万しこの日七十七歳の頃でなり
ありたるの殿中悔改及び観念言うべから

感き年一日しこの日七十七歳の祝宴でありましたが既に悔ひなき観念を持ちつゝ
無事無事の間敬愛の心情を服膺し
すゝて克己の書を敷き少欲知足を座右に
居りまして今日迄所謂男子皆有病の
賞を受け且社会者である幸に日七十の
古稀祝ひ祥すれば克己の書を敷し以て
孝養の支那古代老母の孝養に在つては
天子元氏の如く無絃の壽を保ち此時の現在
の如く祝ふ道理なら多く未来の壽延を
相共に参加の栄を得て以て今昔譚を終
えるなく楽り過ぎて反りませんこの
終りの宴で長曾我部閣下の健康と無疆
なる祝言の無辞新のことゝて申す
大正四年十月十日　厚狭小島治房